

森でみつけた白い舟

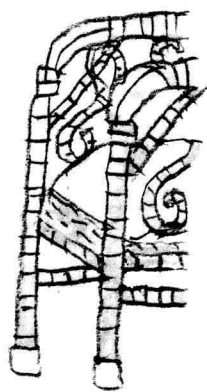
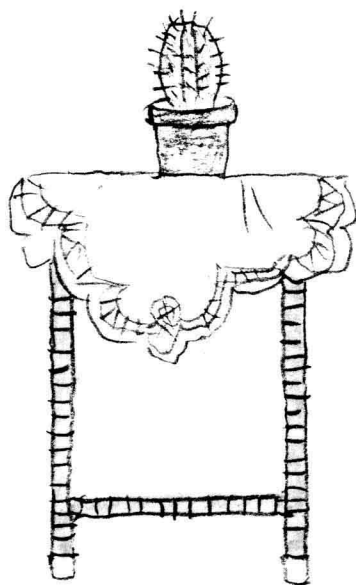
岡野薫子

絵 鈴木義治



森でみつけた白い舟

岡野薫子 作
鈴木義治 絵



岡野薫子

森でみつけた白い舟

講談社 1973

225P 22cm (児童文学創作シリーズ)

おかのかおるこ

森でみつけた白い舟

昭和48年 7月24日 第1刷発行

作者 おかのかおるこ
岡野薫子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京 03 (945) 1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 東洋印刷株式会社・双美印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

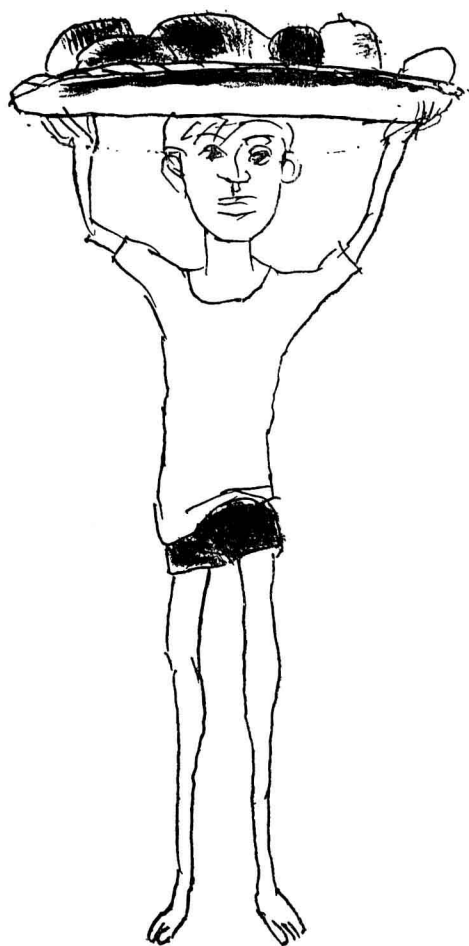
定価 600円

© 岡野薫子 1973 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-188924-2253 (0) (児1)

も
く
じ

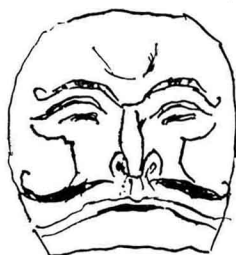


第一章

山の湖……………6

第二章

思い出のへや……………50

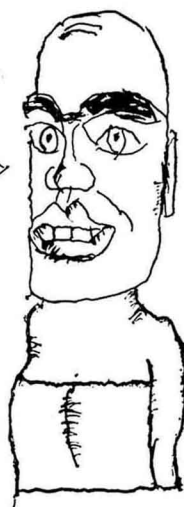


第三章

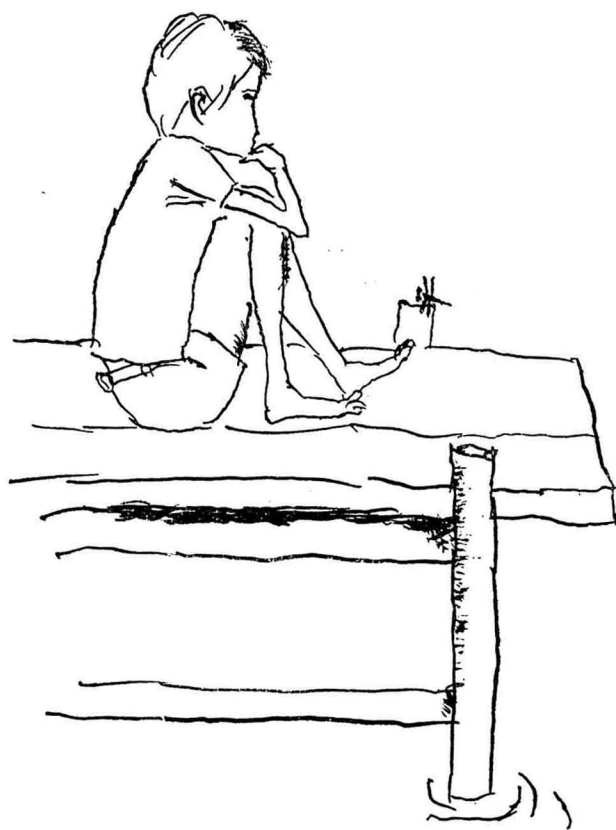
むすんだ木……………118

第四章

わすれてしまった土地……………186



森でみつけた白い舟



山^{やま}の湖^{みずうみ} 第^{だい}一^し章^{しょう}

1

列車^{れつしゃ}のまどの外^{そと}を、こい緑^{みどり}につつまれた山^{やま}々^{やま}が、せまるように近^{ちか}づいた。——と^{おも}思うと、列車^{れつしゃ}はすぐトンネルにはいった。

「ほうや、そろそろ、おりるしたくをしたほうがいいよ。」

タカシの前^{まえ}にすわっていたおじいさんは、あみだ^{うえ}なの上^みを見あげて、そう、うながした。

「あのリュックと、ポストンバッグだったね。ま、いいから、すわってなさい。わしがいま、お



ろしてやるから。」

「すみません。」

タカシは、ぺこりと頭をさげた。

上野からずっといっしょだった、おじいさんである。この列車の終点、直江津までいくのだそうであった。

「子どものひとり旅なものですから、よろしくお願いします。」

見送りにきたタカシのおかあさんが、そうたのんだばかりに、おじいさんは、まるで自分のまごかなにかのように、タカシに気をつかってくれた。そうすることが、うれしいうであった。

「あれは、くわ畑だよ。ここらはむかしからの養蚕地帯でね。」

まどの外のけしきを見ながら、いろいろおしえてくれたり、また、いろいろ、タカシにたずねたりした。

「ふうん、ぼうや、おかあさんとふたりぐらしか。そりゃ、さびしいなあ。五年生にしちゃ、ずいぶんしっかりしてると思ったが……。」

それは、タカシの家族のことをきいたおとなたちが、きまって口にするこぼだった。このこぼをきくたびに、タカシはいごちがわるくなる。二年まえ、タカシのおとうさんが病気で死んでから、おかあさんは、タカシといっしょに工場の寮に住みこんで働いていた。

「あそこらは、むかしからの避暑地で、古い別荘がいっぱい建つてるところだよ。」

タカシのいくさきが、神山ときいて、おじいさんは、そういった。なんでもよく知っている人だった。

列車がトンネルをぬけた。

そこちこで、人々がおりるしたくをはじめている。のったときはあんなに満員だった車内が、いまは、うそのようにすいていた。

タカシはリュックをせおいながら、おじいさんの顔を見た。これっきりわかれてしまうのかと思うと、なんだかさびしかった。

「気をつけていくんだよ。駅をおりたら、神山行きのバスにのるんだよ。汽車のつく時間とれんらくしてはるはずだから、バスにのりおくれないうにしないよ。」

通路にでたタカシのせなかに、おじいさんの声が追いかけた。

列車は、小さな駅のホームにすべりこんだ。花壇にさいたダリアの花が、あざやかに、タカシの目にうつった。

強い夏の日ざしが、ホームにてりついている。しかし、ふいてくる風は、高原のさわやかな風だった。

登山すがたの若者や、子どもづれの家族が、ほっとした顔で、改札口のほうへ歩いていく。タカシも、車内のおじいさんに手をふってから、歩きはじめた。

小さな駅のわりに待合室は広く、そこには、上りの改札を待つ人々があふれていた。夏の休暇をすごした人たちがこれから帰るところらしく、なかにアメリカ人らしい家族もまじっている。

タカシは、神山行きのバスにのりこむと、これから、やっと、ほんとうのひとり旅がはじまるような気がした。

バスのお客は、タカシのほかに、土地の農家の人らしいおばあさんふたりと、それだけだった。

「夏も、もう、おしまいだねえ。」

「はあ、よそからきなさったしゅうも、帰っていきなさるし……。」

おばあさんたちは、のんびり、そんなことばをかわしている。

タカシはズボンのポケットから、だいにしまつてあった手紙をとりだした。夏休みのはじめにおじさんからもらった手紙で、あて名は青木礼子様と、母の名になっている。タカシは、何度読んだかわからないその手紙を、もういちど、読みかえしてみた。

『……まえにも、おさそい申しあげましたとおり、こちらは、なんのえんりよも気がねもありません。あなたも息ぬきにこられるとよいのですが、仕事のつごうでむりのようなら、隆くんだけでも、ぜひ、おこしく下さい。二十日すぎには、家内の末弟の一家もまいります。その子どもが、孝平といって、隆くんとおなじ年ごろです。ふいにこられても、ひとりやふたり、べつだんどうということもありません。——が、まえもってお電話くだされば幸いです。』

達筆な手紙には、駅をおりてからの略図もそえられてあった。

略図によると、バスを利用すれば、終点まで約十五分、そこでおりて、湖ぞいに南へ約三十分、もどるような感じで歩くと、ひとりでに、その別荘の下にでるらしい。駅から歩くつもりなら、一時間ほどで、別荘のわきの道にでられると、書いてある。

タカシは、湖を見ながら歩いてみたかったので、はじめからバスにのることに決めていた。地図だけ、胸のポケットに入れると、タカシは、手紙のほうはポストンバッグにおしこんでしまった。

バスは商店街を通りぬけ、国道にでた。

(おじさんって、どんな人だろう?)

タカシは、ちょっと、胸がどきどきした。

おじさん——といっても、タカシのおばあさんのにいさんにあたる人なので、ほんとうは、タカシの母のおじさんである。タカシからいえば、大おじさんともいうのだろうか。タカシが、まだ、五つか六つのころ、まだ元気だった父につれられて、大おじさんの家にいったことがあった。広い屋敷には、大きなサンルームがあつて、冬だというのに、中はあせばむほどだった。そこには、やしや、びんろうじゆなど、南方系の植物がしげり、めずらしい鳥が飼われていた。当時小学校二年の和美という女の子が、タカシをひっぱっていつて、おうむや、いんこを見せてくれたことを、タカシはよくおぼえている。だが、大おじさんがどんな人だったかは、さっぱり思ひだせなかった。



ことし七十二さいになるといふ、その大おじは、たいそうふうがわりな人だそうであつた。わかいころ、ひとりで南方にわたり、現地に住んで、動物商として、一代を築きあげたという。

いまから三十年まえ、世界大戦のはじまるまえに日本に帰つてきていたが、それから、レスランの経営、古美術の売買など、いろいろな事業を手広くおこなつていた。動物相手の仕事からはおよそかけはなれてしまつたが、なにをしても、ちゃんとなりたつていく人だつた。

「おじさんは、運の強い人でね。」

と、タカシのおかあさんはいつていた。

「つぎは、神山終点でございます。どなたさまもおわすれものないように、おしたくをお願いします。」

どなたさまも——なんていつたつて、バスの乗客は、タカシひとりになつていた。

2

タカシは、バス停の近くで買った麦わらぼうしをかぶつて、湖にそつた道をてくてく歩いていった。頭の上には、黒いまでに澄んだ青空がひろがつていた。

人でにぎやかだつたのは、停留所の近くだけで、あとは、すぐ、静かな林の中の道になつた。木のあいだから、湖がちらちらする。こい霧がわきだして、道のほうまでながれてきていた。

「おかあさんも、くればよかったのにな。」

タカシは思わず、口にだして、そういった。

休暇だってもらえるのに、おかあさんは、「おじさんの別荘なんて、きゆうくつでいやだわ。そんなにいききたいなら、あんた、ひとりでいっていらっしやい。」

といったのだった。

この、せいせいしたけしきを見るだけだって、きたかいはあったのに……。

「ほんとに、おかあさんもくればよかったのにさ。」

タカシは歩きながら、もういちど、東京にいるおかあさんにむかって、いってやった。

林をぬけると、道がYの字形にわかれたところにでた。わかれ道に、野菜やかんづめをならべた小さな店が、ぼつんとたっている。夏だけの臨時の店らしい。

右の道はのぼりになっていて、上のほうの木立ちの中に、別荘らしいきのこ形の赤い屋根が見える。左の道は、湖のすぐきわを、ずっとさきまでつづいている。

タカシは、ボストンバッグをおろすと、地図をとりだしてながめた。地図は、左の道をいくようにとしめしている。

「ぼっちゃん、どこにいきなさるかね。」

タカシはびっくりして、顔をあげた。

店の女の人が、にこにこしながら、タカシを見ていた。

「神山の 一七 一番……。」

タカシがそういうと、女の方は、

「おや、黒い別荘かね。」

とうなずいて、左の道をゆびさした。

「この道を二十分くらいいくと、すぐ右手の山の中に見える大きな別荘さね。三つめのさん橋の、ちょうどむかいがわだよ。」

ちよつと待つて——といいおいて、女の方は、そそくさ、店の中にはいつていった。そして、新聞紙に、とうもろこしを何本もつつみこむと、それをかかえてもどつてきた。

「これ、別荘のだんなさんにさしあげてくれ。よろず屋の佐藤ですつていえば、わかるから。あんた、ふろしきかなにか、もつてない？」

タカシのわたししたふろしきは、女の方の手に、たちまち、とうもろこしのつつみにかわつてしまった。

「これなら、もちいいからね。」

女の方は、にっこりした。それから、また思ひだしたように、すこしばかり花を切ってくるからと、いいおいて、うらのほうへすがたを消した。ふたたびあらわれたときには、いそいで切つてきたらしいダリアやきりんそうなどを、片手にあまるほど、もつていた。おかげで、タカシは両手にいっぱい荷物をもつことになつてしまった。